

中国の洞窟への 好奇心

国際コミュニケーション学部教授
土屋昌明

つちや まさあき

神奈川県茅ヶ崎市生まれ。國學院大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。西安交通大学、中国人民大学などの講師を経て専修大学勤務。Vincent Goossaert 共編、Lieux saints et pèlerinages : la tradition taoïste vivante, Bibliothèque de l'Ecole des Hautes Etudes, Sciences Religieuses, vol. 192, Brepols, 2022。ヴァンサン・ゴーサーと共編『道教の聖地と地方神』（東方書店、2016）。共訳として李松『中国道教美術史 漢魏南北朝篇』（勉誠出版、2022）、ほか。



黒門の前にて

私は、神田キャンパスの国際コミュニケーション学部で中国語および地域研究（中国）、映像とコミュニケーションなどを教えています。ほかに、生田キャンパスの英語以外の外国語のマネージメントもしています。研究としては、中国のドキュメンタリー映画について、さらに中国の宗教（道教）の現状や歴史について勉強しています。

私の研究のうち、文科省の科学研究費助成事業から資金を受けている研究について紹介します。この資金は「科研費」と略称され、日本の学術研究を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」です。原資は日本国民の税金で、それゆえ、厳正なピアレビュー（専門家による審査）を経て、独創的・先駆的な研究に対して助成をおこなうものです。私が代表を務める研究は、本年度から3年間、この科研費を使って、複数の大学の教授6人から成る研究チームを組織し、中国の洞窟をめぐる諸問題について研究しています。

洞窟の人文学

「洞窟」の研究といっても、地質学や地学ではありません。中国の歴史や文化で、洞窟に対する考え方がど

のようにおこなわれたかを研究するのです。一つ、有名な例をあげてみましょう。5世紀前半くらいの人が書いた『桃花源記』という物語があります。だいたいこんな話です。

晋の太元年間（376～396）のとき、武陵（いまの湖南省）のある漁師が谷川で漁をしていた。魚が捕れないので上流にのぼっていくと、桃の林に出た。漁師は不思議に思い、この林のしまいまでのぼっていった。ぼっかりした山のふもとに川の源があり、小さな洞窟があった。のぞくと、奥に光が射しているようだったので、その洞窟に入っていった。

はじめは狭かったが、数十歩行くと、カラリと開けた。そこは広々とした平地で、建物があった。あぜ道はきっちりとして、遠くで鶏や犬が鳴いていた。村の老人や子供まで、みんな和気藹々として楽しそうだった。村人たちは漁師を見て大いに驚き、招いて家に連れていき、酒を出し鶏をつぶして饗応した。村人たちはこう話した。「私たちの先祖は、秦の乱を避けて、妻子や家族を連れてここにやってきました。今はいったい何時代です？」漁師が、世の中のことを詳しく語ってやると、みんなへえーとびっくりした。数日後、漁師が自宅に戻ろうとす



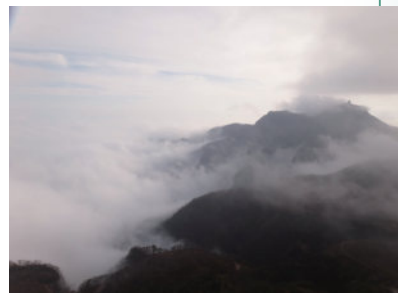
↑茅山の道観の老子像



↑茅山の西の洞窟の華陽洞入口



↑第一大洞天の洞窟調査をする筆者



↑第一大洞天王屋山の景観

ると、村のある人が彼にいった。「この村のことは口外しないでください」

漁師はもと来たコースにそって、所々に目印をつけておいた。街まで戻ると、役所に行って自分の見聞を申し述べた。長官は手の者を連れて漁師の後についていき、目印にそって村を搜索した。しかし、結局道に迷ってたどり着けなかった。

その後、南陽の劉子驥^{りゅうしき}という者が、その村に行ってみようとしたが、現地にたどりつかないうちに病死した。それからというもの、その村へ行こうとする者は誰もいなくなった。

この物語は、現在まで1600年ものあいだ、中国、韓国、日本に伝わり、そのあいだに変形したり、作家によって作り変えられたり、絵に描かれたりしました。しかし、この物語には、わかりにくいところが多々あります。なぜ桃の林があるのか？ 村と桃の関係は？ 洞窟を抜けたくらいで、世間と隔絶するのか？ 劉子驥はどうして病死したのか？ 従来の研究は、これらの問題に回答を出そうとしたり、この物語の歴史上のバリエーションを考察したりしてきました。しかし、私の研究方向は違います。私は、こういう洞窟は本当にあるのか？ あるとすれば、どこに、どのようにしてあるのか？と考えました。

地底世界のイマジネーション

実は、この物語は、4世紀中ごろの『真誥』^{しんこう}という宗教文献に伝わる神さまのお告げに着想を得ていると、ある研究者が論証したのです。『真誥』によると、中国各地の名山の地下には、神が住む地底世界があり、洞窟から入っていける、そこは「洞天」とよばれ、茅山^{ぼうざん}という山の地下にもあり、5つの洞窟から入れる、ということです。茅山は、現在の南京郊外にある実在の山です。

そこで、私は研究チームを立ち上げ、茅山に行つて、『真誥』に述べられた洞窟を探索しました。現在、茅山には道教（中国人に独特の神を信仰する宗教で、日本の神道に相当）のお寺「道観」があり、5つの洞窟のうちの西の洞窟は開発されて、誰でも内部に入ることができます。その洞窟に隣接して、大きな鍾乳洞があり、そこも立ち入れます。もちろん、神さまの世界となっているわけではありません。そうした鍾乳洞の地底世界が、神の世界のイマジネーションをもたらしたのです。

洞窟の現地調査のインパクト

現地に行ってみると、洞窟がいくつもあることがわかりました。ほかの4つの洞窟が、現在のどれにあたるのか？ 私たちは、地元の人びとの協力のもと、『真誥』の記述にもとづきながら道なき道を探索し、とうとう北の洞窟を発見しました。残念ながら、自然のままの洞窟で、水没している可能性もあり、危険なので立ち入りませんでした。古代の人々は、その洞窟の奥に神の世界があると信じていたのです。

『真誥』によると、洞天は中国に36カ所あり、後世の文献では、「十大洞天」と「三十六小洞天」として、その地名が示されています。私たちの研究チームは、すでにその重要な地点のいくつかに現地調査に行き、実際に洞窟が存在すること、現地には洞窟信仰が伝わっていることを見いだしています。

「三十六小洞天」のなかに「桃源洞」という洞天も登場します。「桃源洞」には本当に洞窟があるのか？ 『桃花源記』の話と「桃源洞」の関係はいかに？ それは今後の調査研究を待つしかありません。

私たちの研究は、中国の学界を刺激し、洞天の研究の重要性を認識させました。いまでは、北京の清華大学が中心となって、洞天の景観を世界文化遺産に勧めるための学術会議が開催されるに至り、私たちも参加しています。